

法然上人が弟子から、弥陀の本願で選択本願は「なぜ南無阿弥陀仏なのですか？」と聞かれて、(1) 仏意測りがたし。(2) 簡単であり誰にでも可能、(3) 無量光(智慧)と無量寿(慈悲、いのち)がこめられている、と答えられたと伝えられています。現代人には、「そうなんですか」といっても、三つの理由ですぐに納得は難しいと思われます。私にとって未解決であった「仏さんがいらっしゃる」の命題にも関係すると思われ課題で、やっと納得がいくような思いになりました。

仏とは物理的に認知するようなものではなく、はたらきとして認知されるものです。仏のはたらきは、「私の相(すがた)」をはっきりと知らせることです(無量光)。そして迷いを繰り返す私を「救う」はたらきをする(無量寿)機能として存在しているということです。

心、意識という領域をどこまで見通しているかで「私の相」の全体像が違ってきます。仏教に出会う前までは心の内面といっても小学・中学(社会人になっても)の反省会レベルの反省にとどまります。仏教に出合ってから、意識の表面的な面しか見てなかったと気づかされます。内観(心の内側を見る、仏に無量光に照らされて見る)で、自分の心の内面の全体(深層心理)が見えてなかったと知らされました。

唯識では、学んだり経験したことなどを蓄える(記憶)場所を深層意識の阿頼耶(アラヤ)識と言い、蔵識とも言います。蔵敷は貯える一方、貯えた物を基礎にいろいろ自分の行動や発言に繋がる記憶の領域です。

日頃の表面的な意識(第6識)と阿頼耶識(第8識)の間に末那(マナ)識(第7識)を想定しています。末那識は煩惱と言われる場所です。煩惱にはいろいろな分類がありますが、貪欲、瞋恚、愚痴がよく知られています。見惑(ケンワク: 見方、考え方の迷い、後天的に身に付ける)、思惑(シワク: 感情や欲の迷い、先天的に持つ物)と分類することもあります。その見惑の具体的なものは我痴、我見(邪見)、我慢(憍慢)、我愛です。

我痴: 仏教なんか要らない、宗教なしで幸せに豊かに生きている人は一杯いる、と考えることです。

我見(邪見): 私は物事を正しく見ている、物事の全体像を事実に沿って把握している。間違いないとする。

我慢(憍慢): 他の人と比べて上下、勝ち負けなど劣等感、優越感で揺れ動き穏やかでない心。

我愛: いくら綺麗ごとを客観的に主張しても、内面の我が身が可愛い心が思考に影響を及ぼす。

人間の心の状況を仏教では六道(地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天界)で表わし、人は六道を輪廻、経巡っていると指摘します。正信偈には自覚の内容として邪見・憍慢・悪衆生と親鸞は言われています。情報や行動・発言は全部末那識経由で出入りしていてアラヤ識の煩惱にどっぷりと汚染されています。

仏の悟りの基本は「縁起の法」です。宇宙中の事象はこの法で展開していて、諸行無常、諸法無我と言い当てます。そのために「さるべき業縁の催さば、いかなる振る舞いをもすべし」と自覚するのです。

77年間の経験から「自分の在り様」を仏が「邪見・憍慢・悪衆生」とか「汝は凡夫なり」「人間に真実なし」ということが仏の言う通りです、と頭を下げて、南無阿弥陀仏、と「自分の相(すがた)」を陰ひなたなく照らし出されました、仏の言う通りでございます(地獄は一定すみかぞかし)、と受け取れるのです。

一方、仏が摂取不捨する(救う)はたらきをどう受け止めるかです。如来は迷いを繰り返す人間存在を見透かして、迷いを離れることのできない存在を悲しまれて(大悲されて)気づかせよう、目覚めさせようと限らない取り組みをされるのですが、私は世間道の善悪・損得・勝ち負け等に迷っていることすら無自覚に振り回されて生きてきました。仏は我々衆生を、分別的思考で迷っていることに気づく、目覚めることは人間には不可能と判断して、大悲されて、法蔵菩薩は我々の心の中に身を捨てて、衆生と一体となり、私の念仏、南無阿弥陀仏と成って(私と一体(寄り添い)となり)、私の信心と成ってくれていることを聞かせていただきました。

よき師を通して僧伽に出遇い、よき師、よき友が弥陀仏(如来)の徳を讃えて、南無阿弥陀仏、と讃嘆される心に触れる(諸仏称名の願、第十七願の世界)こともできました。よき師は「出遇った住岡夜晃師の言葉『生命を継ぐ者は、生命を捧げてゆく』の如くに生き切られたことを感得しました。その僧伽の中で私はお育てをいただき、多くの念仏者の生きざまを実感することができました。

浄土教の基本『無量寿経』を親鸞聖人は一貫して『大無量寿経(大経と略す)』と呼ばれ、「真実の経、大無量寿経これなり」と言われています。他のお経の多くは出家者が、身と心の修行をして、成仏する道を教えています。しかし、この大経は出家者ということではなく、全ての衆生が救われる道を浄土の教えとして説かれていたのです。

大経には法蔵菩薩の物語が説かれています。本来我々がしなければならない修行を、我々に代わって法蔵菩薩がなさって、全ての衆生を救うために48の本願の誓いによって浄土を建立し、方便法身の南無阿弥陀仏となり、我々に信心を届けようと常にはたらきかけていることが教えられているのです。

平野修師によれば、「なぜ故に仏が我らに代わって修行を成就なさったのかというと、我々は仏を知らず、疑いを通して、いつの間にか我が力によって我が身を助け遂げることができるという邪見・憍慢の中にあつたということ。それは全体が嘘であつた我々、嘘を本当にして生きようとしている我々の在り方に対して、嘘は嘘だからみとめられない。許さないとするのが本願です。我々は本当でない邪見・憍慢に立って生きようとしている。その上で「信じられない、そんなバカな話があるか」と言っておる。我々の根っこは邪見・憍慢であつたと。そしてそれは誰かが壊すわけでもなし、抑えつけたわけでもなくて、嘘は嘘の故に成立しないという、そういう翻りが起こるわけです。こういう翻りの構造を本願ということで表わしている。」と書かれています。

法蔵菩薩は迷える衆生を、仏のはたらきの場・浄土へ迎え入れ、仏の智慧(転成の智慧)を身に付け、念仏する存在へと導き、あらためて人生の現場に戻り、菩薩道を展開する存在へ育てようとされ、はたらき続けているのです。

仏は、衆生の手を借りないで、仏は仏自身を証明される。どのようにしてかということ、「なるほどあなたは仏である」ということを納得せしめる形で、仏は仏を証明する。どうすることか？ それは衆生を教化するという意味である。衆生を教化してさとらしめるという形で仏は仏自身を証明されるのです。

その教化を蒙ったということ「信ずる」というわけです。仏の教化を蒙った、「なるほど仏でおわしました」とうなずくことが「信ずる」ということです。その教化の意味が「光明」という言葉で表わされているわけです。

「光明無量」ということばは、教化の至らぬ所はなしという意味です。仏の教化にあずかって仏を信じるわけです。仏の教化にあずからずに仏を信じるなどということはあり得ません。

第一深信:「深心(じんしん)」といふはすなわちこれ深く信ずる心なり。また二種あり。一には決定(けつじょう)して深く、自身は現にこれ罪惡生死の凡夫、曠劫(こうごう)よりこのかたつねに没(め)つねに流転して、出離の縁あることなしと信ず。二には決定して深く、かの阿弥陀仏の、四十八願は衆生を摂受(じゅ)したまふこと、疑なく慮(おも)んばかりなくかの願力に乗じてさだめて往生を得と信ず。

方便法身の南無阿弥陀仏を信心としていただき、煩惱まみれの分別思考の問題点に気付き、生きる姿勢を常に正される方向へ導かれます。南無阿弥陀仏の念仏は、仏やよき師の教え(言葉)を憶念して、その思いが持続(念持)し、忘れない(不忘)生活へ我々を導き、天命に安んじて人事を尽くす生き方に導かれます。

2026(R8)年10月(第460回目)の例会は下記の如く行います。

日時:10月19日(月)、午後8時—9時30分まで 講師:田畑正久、

次々回:11月9日(月)、12月21日(月)、R9年1月18日(月)、主催:歎異抄に聞く会(高家)

「教行信証に学ぶ会」:10月8日(木)、12月24日(木)、R9年2月4日(木)、4月6日(木)